刊行によせて

2014年3月9日（日）、国際常民文化研究機構の第5回国際シンポジウム「渋沢敬三の資料学―日常史の構築―」が開催されました。もともとは、国際シンポジウム「庶民・日常への眼差し―世界常民学への道―」と題し、渋沢敬三没後50年にあたる2013年12月に、共同研究グループ 「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」の公開研究会と合わせて2日間にわたり行う企画でしたが、諸事情により延期され、このたび実施されました。

本シンポジウムは、記念事業としてさまざまな側面から光が当てられた渋沢敬三の人と学問のまとめの機会となるとともに、機構の目指した、いつの時代、いつの地域においても大多数を占める普通の人々、“常民”の暮らしを対象とする資料論、分析視角や方法を国際的に拡大、深化させ、渋沢が構想した常民学の有効性・可能性を国際的に問うという、機構にとって最終年度にあたる総括の場としての性格を併せ持つことになりました。当日は、渋沢敬三の御子息、渋沢雅英氏が高齢をおして臨席され、祝辞を頂き、会に華を添えてくれました。

シンポジウムは、ボン大学名誉教授ヨーゼフ・クライナー氏の基調講演「ヨーロッパにおける日本関係コレクション―美術・工芸から民具へ―」で始まり、ヨーロッパにおける日本文化への視点が古典文学から民衆生活へ移行する意識変化の過程を、博物館における展示の具体例を挙げながら時期区分を設定しつつ丁寧に説明されました。引き続き、パネル報告として、曹幸穗、中国農業博物館農業史研究所前所長は「伝統的農具にみる中国農民史」と題し、中国農具の技術改良や地域性の特徴から中国農民の歴史を概括し、ジョセフ・キブルツ、フランス国立科学研究センターSenior Research Fellowは「お札（ふだ）の世界―世界のお札（ふだ）」で、自身の最初のフィールド、長野県木曽郡開田村の農家の玄関に貼られた元三大師のお札を糸口にヨーロッパの聖像画までお札から読み取れる情報の性格を論じ、宮本瑞夫、宮本記念財団理事長は「映像に見る常民生活の伝統と再生」で、実父・馨太郎の業績を交えながらアチックフィルムの持つ時代性と現在的意味を検証されました。休憩をはさみ、福岡正太、国立民族学博物館准教授は「音盤に聴く東アジアの音楽交流―日本コロムビア外地録音資料を例に―」で、録音における歌曲・歌詞解釈の異同を通して民族性はじめ植民地政策を探求する可能性を提示しました。崔順權、韓国国立民俗博物館学芸研究官は「農村の生活文化調査と持続的な記録の必要性―全羅南道長興郡（チャンフングンサングム）上金マウルの事例を中心に―」のテーマで、現時点で一農家の生産・生活具の一切を記録し100年後に残す事業の実際とその意義を紹介されました。最後に、基調講演を含め6名の発表に対するコメントが崔吉城、東亜大学教授、佐藤健二、東京大学教授からなされ、会場からの質疑応答をもって全日程が終了しました。

今回は、資料の分野として、各パネリストからの農具、画像、映像、音声、生活誌を各パートとし、総譜として常民の日常史が描かれる可能性の方向性が提示できることを主催者側としては意図しましたが、全体として、渋沢がいう“ハーモニアスデヴェロープメント”が達成できたか否かは、聞き手に委ねられる結果となりました。しかし、1930年代に農・漁民に自らの生活誌の執筆を勧めるなど、改めて渋沢敬三の慧眼に思いが至りました。国際的常民文化研究における渋沢敬三の学問の有効性を問う懸け橋としても、さまざまな示唆を与えてくれたシンポジウムの内容でした。本報告書は、当日の発表時にご覧いただいたパワーポイントの画像は掲載できませんでしたが、その折の会場の臨場感を改めて思い起こさせてくれる力作です。この場を借り、改めて登壇者、聴衆のみなさまに謝意を表したいと思います。

2014年　10月　吉日

第5回国際シンポジウム実行委員会委員長

佐野　賢治